

二道説について

大 友 康 敬

0 *Chândogyopaniṣad* (ChU.) と *Bṛhadāraṇyakopaniṣad* (BĀU.)¹⁾ とに伝えられる五火二道説は初期のヴェーダ文献より徐々に芽生え始めた再生の観念²⁾を体系的に組織し、輪廻と解説の構造を完成させたものと認められる。この教説は「五つの祭火の教え」(pañcāgnividya)³⁾と「神々への道」(devayāna)「祖霊への道」(pitryāna)を説くいわゆる二道説⁴⁾とからなる。ChU. の devayāna の一部と同一の記述が ChU. 4, 15 にある。中期以降の古ウパニシャッドである *Muṇḍakopaniṣad* (MuU.)、*Praśnopaniṣad* (PrU.) にも二道説が説かれる。本稿ではこれら二道説の経路を中心に比較してみたい⁵⁾。

1 **devayāna** 経路は連続して示されるが、I～Ⅲに分割して表示した。

	ChU. 5, 10, 1-2	BĀU. 6, 2, 15
I	炎→昼→月の満ちる半月→太陽北行の 6 箇月→	
II	歳→太陽→月→	神々の世界→太陽→
III	電光→brahman(n.)	電光の火→brahmaloka(m. pl.)

I は ChU., BĀU. とともに一致している。II において、ChU. が歳→太陽→月とあるのに対し、BĀU. は神々の世界→太陽ととあり歳と神々の世界⁶⁾とが相違し、さらに月を経由しない。Ⅲの部分、ChU.: 電光 (vidyut-) と、BĀU.: 電光の火 (vaidyuta-) とは同じとみてよいであろう。最終の到達点である ChU.: brahman(n.) と BĀU.: brahmaloka(m. pl.) とは看過しえない相違である。

2 **pitryāna**

	ChU. 5, 10, 3-	BĀU. 6, 2, 16
I	煙→夜→月の欠ける半月→太陽南行の 6 箇月→	
II	祖霊の世界→虚空→月→虚空→	祖霊の世界→月→虚空→
III	風→煙→雲→雨雲→雨→	風→雨→地→
IV	米, 麦, 草, 木, 胡麻, 豆→精液→母胎	食物→男なる火→女なる火 ⁷⁾

I は表現は異なるが ChU., BĀU. とともに一致する。夜→月の欠ける半月という経路は devayāna の昼→月の満ちる半月と対照的である。ChU. は太陽南行

の6箇月の後、「彼らは歳に到達しない」という一節がある。さきに devayāna の経路Ⅱにおいて BĀU. が神々の世界を経由したが、pitṛyāna の経路Ⅱでは ChU., BĀU. とともに祖霊の世界にはいるという。また ChU. は月にはいる前に虚空を経由するというが、BĀU. では、これを経由しない。ChU. では月で暫く留まり折り返すというが、まったく同じ道を折り返すのではない⁸⁾。BĀU. では月に到達した後食物になり神々に食べ尽くされると虚空にはいると説かれる⁹⁾。

3 五火二道説以降の二道説

3-1 MuU. 1, 2, 10-11 MuU. 1, 2, 10においてこの世への再生が説かれ、それと対置する階梯が1, 2, 11において説かれる。ともに pitṛyāna, devayāna の語は現われないが、条件のたて方が五火二道説¹⁰⁾に類似している。

devayāna は「太陽の門 (sūryadvāra-) を通り、……puruṣa の在る所に行く (paryanti)」と説かれ、経路としては太陽の門¹¹⁾を通過するとするのみで、死後火葬されるのか否かも不明である。最終の到達点が brahman (-loka) ではなく puruṣa の在る所とあるのも注意すべきであろう¹²⁾。pitṛyāna の経路は「彼らは天空の頂 (nākasya prṣṭha-)」¹³⁾において善行に応じて留まった後、この世にあるいはより劣った「世界」に入る (viś-) と説かれる。天空の頂が五火二道説でみた月の機能に類似する働きをもつことが知られる¹⁴⁾。

3-2 PrU. 1, 9-16 PrU. 1はKabandhin Kātyāyana の「師よ、一体これらの生類はどこから生まれてくるのですか」¹⁵⁾という質問(1, 3)に Pippalāda 仙が答える(1, 4-16)形で説示される。1, 9が pitṛyāna に関する部分であり、ここで「南行 (dakṣina-)」が pitṛyāna であるとする。南行をとって月の世界を獲得し (abhiḥi-) この世に再び帰ってくると説かれるが、月で留まる期間は示されない¹⁶⁾。これに対して devayāna (1, 10-) は「北行により (uttareṇa)」と表現されるが、それが devayāna であるとは明言されない。経路は「北行により太陽に達する。」と説かれ、条件として「苦行により、梵行により、信仰により、知識によって、アトマンを探求して」という。「苦行、梵行を有する者らは brahmaloka を有する」(1, 15) から太陽と brahmaloka の関係を思わせる。

4 むすび 上の比較から、二道説の経路は五火二道説の象徴的な表現が MuU., PrU. において簡略化されたといえる。devayāna の到達点には動揺がみられるが、これは MuU., PrU. の教義の傾向を考察する上での一つの視点を与えるであろう。pitṛyāna においては、月が折返し点として位置づけられているようである。devayāna を進む条件は修行的側面がより具体化される一方、五火二道説

の agnihotra 祭を背景とする秘義的な知識¹⁷⁾を条件とせず、関連も薄れている。

ChU. 4, 15, 5 にも ChU. 5, 10, 1-2 の devayāna と同一の経路が示されるが、これについては紙数の都合で省略する。

- 1) ChU. 5, 3-10, BĀU(K). 6, 2, 15-16; BĀU(M). = SB(M). 14, 9, 1, 1-19.
- 2) 井狩弥介「ヴェーダ祭式文献にみられる再生觀念の諸相」『人文科学報』65, 1989, pp. 69-78.
- 3) ChU. 5, 3-9; BĀUK. 6, 2, 9-14; BĀUM. = SBM. 14, 9, 1, 12-17. また JB. 1, 45-46 にも説かれている。詳細は H.W. Bodewitz, *Jaimintya Brāhmaṇa I*, 1-65, Leiden 1973, pp. 110-123, 243-253 を参照。
- 4) ChU. 5, 10; BĀUK. 6, 2, 15-16; BĀUM. = SBM. 14, 9, 1, 18-19.
- 5) KauṣU. 1, 2 には, JB. 1, 17-18; 45-46; 49-50 と類似する「神々への道」(devayānam panthānam) についての記述がみられるが、これは注記で触れるにとどめる。
- 6) KauṣU. では諸々の神々を通過(1, 3)して brahman に迎りつく(1, 4f)という。
- 7) 男なる火(puruṣāgni), 女なる火(yoṣāghi)の箇所は BĀUM. にはない。
- 8) 「〔以前に〕来たときと同じこの道(adhvan)を再び戻っていく」と月から虚空へ再度戻ることが説かれるが、虚空からそれ以降の道は戻らない。また戻るならば、輪廻転生の過程が成立しなくなる。さらに ChU. 5, 10, 7-10 ではどのような母胎にはいるのかと、二道を経ない者の行方も説かれる。
- 9) KauṣU. は月の試問が brahman へ向かうのと輪廻の分岐点になる。
- 10) ChU. 5, 10, 1; BĀUM. 6, 2, 15; BĀUM. = SBM. 14, 9, 1, 18
- 11) sūryadvāra- という成語は MuU. のみに見られる。
- 12) MuU. の場合は「このように知った」という条件は示されないが、devayāna を進む者の条件が「森において、苦行と信仰とを修し、寂靜であり乞食行を行ずる賢者ら、欲望を離れた彼ら」とあり、より具体的にかつ強調されているといえる。
- 13) AV. 7, 80, 4; 9, 5, 15; 11, 1, 4; 30; 37 などの文脈から nākasya pṛsthā- が死後の行方であると知られる。J. Gonda, *The Savayajñas*, Amsterdam 1965, p. 123; 220. 参照。
- 14) MuU. での pitṛyāna を進む者の条件: 「困惑した者らは祭祀と善行とを最善のものと思い、他なるすぐれたものを知らない。彼らは……」
- 15) cf. ChU. 5, 3, 2; BĀU. 6, 2, 2 (Pravāhaṇa Jaivali の質問)。
- 16) 「『祭祀と善行とをなされた仕事』と念想する者らは」を条件とする。
- 17) 井狩弥介「輪廻と業」『岩波講座東洋思想第六巻インド思想2』283頁以下参照。
〈キーワード〉devayāna, pitṛyāna, ウパニシャッド

(大谷大学大学院修了)